Gallery 愛海詩
えみし

津軽の華
こぎん刺し作品展

伝統を守る、弘前こぎん研究所

6月3日～6月15日

特別号　No.38
愛海詩の会
会　報
平成26年5月25日発行
編集発行人／ギャラリー愛海詩
佐藤睦子
〒064-0821
札幌市中央区北1条西28丁目2番17号
TEL・FAX／(011)613－1112
WEBSITE
http://www.emishi-s.com
E-mail:kougei@emishi-s.com

住き環

鮮やかな緑の葉が陽に眩しく、野の花、草木が一斉に咲き誇っているかのような季節です。このある種、解き放たれたような喜びが、北の街に住む人々には一入です。ホッとする笑顔と語らい、そんな人々の様子を見ていると、こちらまでフッと、和み、嬉しくなります。

そしてつくづく、この自然界の営みは、深く人間の心と関わっているとも思います。自然界の全ての成り立ちは、五大から成ると言われています。地、水、火、風（空気）、空（空間）。そしてそこに、識大がはいり込むと言います。識大とはつまり、意識、人間の思い、自然界の思い、といったことです。この六大との関わりの中で、人々は人として確かなものを育んでいるのではないかと思います。それは、自身の心の定め方、有様といったことです。その確かなものの中から、物に込められた思い、作品に込められた祈りのようなものが理解できるようになるのです。素敵な人、素敵な物と出合っていれば、自身も住く、自然とすばらしいものを解するようになります。そういった事が、日本の文化の細やかさ、心の襞、確かな技と心を育んでいるのです。

私達は今一度、この好ましい日本の文化、手間、暇かけた確かな作品に心を傾けたいと思います。そして、この宇宙の万物は、巡り巡って、環を成して左様し合っていることを心に留めたくも思います。

物に込められた思い、祈りが解り、側に置き尚且つ、そこから伝わって来るエネルギーをいただきます。そしてその、よき影響を回りの人に与えられますよう願います。そのような一端を担う、愛海詩の会、ギャラリー愛海詩でありたいと思うのです。

（佐藤　睦子）

こぎん研究所　作業風景
糸を繰り、機（はた）で織り、裁断し、布地に一針ずつ刺して行く。丁寧な手作りの風合いの良さがこういった仕事から生まれて来る。使うごとにその心地良い風合いが伝わって来る。

★ご案内　弘前こぎん研究所　成田貞治氏を囲む会
来たる6月4日(水)、5日(木)、午後3時から午後4時30分まで、弘前こぎん研究所の所長が来札され、ギャラリー愛海詩2階で、こぎんについてのお話し、その歴史、創作、魅力などを語っていただきます。両日共、先着8名様です。めったにない機会ですので、是非、ご参加下さい。ご希望の方はギャラリー愛海詩までご連絡下さいませ。〔011(613)1112〕

こぎん研究所のこぎん刺しには多くの先達の思いがこめられている。手間がかかるこの非能率的だが美しい手仕事を残して行こうとする津軽の人々の実直さ、誠実さ、忍耐強さを思うのである。

横島直道氏が編者である「津軽こぎん」という本がある。もう絶版されているのだがすばらしい本である。その中の序文、村岡景夫氏の一文を、ここにご紹介します。村岡氏の文は今から四十年ほど前に書かれたものだが今もって瑞々しく津軽のこぎん刺しを美しく、せつなく、感動的に捉えている。

豊かな天産に恵まれているとはいえないばかりか、しばしば冷害に見舞われることが多く、そのうえに永く藩政の厳しい掟によって抑圧されていた北辺、津軽の農民のなかから、誰にすすめられ助けられることもなく、農民自身の苦しい生活の必要と知恵とから、優れた刺し子の伝統が生れそだって来た。それが津軽の「こぎん」である。「津軽こぎん」は稀にも美しく、清らかに咲きでた津軽野の華である。

こぎん刺しはかぎられた制約のなかのつつましい暮しのなかから、その必要に迫られて生れ、そだてられて来たものである。

「こぎん」の美しさは生活の用途から生れて来た知恵と永い伝統にそだてられて来た技術の集積である。美におぼれることを知らず、制約のなかにいてそれを越えることが出来た「自由」のあらわれとして生れて来たのが「こぎん」の美しさである。

刺し方の基礎が糸目を拾う数理の法則に忠実であり、材料が自然であり、仕事が誠実であるかぎり、「こぎん」の心と美しさとは新しい時代に新しい用途に生きつづけうるであろう。

ワインボトルクーラー袋
（高さ26.5cm、直径9cm）
こんなかわいらしい袋にワインボトルを入れてプレゼントされたらうれしいですね。ワインボトル入れだけではなく他にも用途いろいろです。

右から、手付き巾着（よこ29cm×たて24cm×マチ8cm）
敷物、書類入れ
身の回りに置いて使いたい楽しみたい作品です。使うごとに豊かな風合いが増してくる、「こぎん刺し」の手ざわりの良さが心に伝わります。

小袋（小）
二ツ折名刺入れ（よこ13cm×たて19cm）
使い込むほどにその人に寄りそってくれるような作品です。長く長く、その一針一針の確かさが伝わってきます。丈夫で、手から愛しさが伝わってくるようです。

あけびかご上袋付
（よこ30cm×たて21cm×巾10.5cm）
自分だけの「あけびかご」に出合えます。こぎんの上袋がおしゃれです。あけびのかごは使うごとに良いつやが出て来ます。

ご挨拶　～作品展によせて～
弘前こぎん研究所所長　成田　貞治

最近の「こぎん刺し」第何時ブームか分かりませんが、数年前より注目されて来た事は事実です。その裏付けとして新しい本が数冊出て来ています。又NHKで『美の壷』『こんなステキな日本が』『すてきにハンドメイド』BS日テレの『檀れい　名匠の里紀行』が全国版で放映された事が大きな要因の一つと考えられます。このようにメディアに取り上げられる事で「こぎん」の知名度が上がり、それに加えて地元においても三年続けて「こぎんフェス」が行われ「弘前こぎんマップ」などが作られました。そしてまた学校での取り組みや若い方の作品も多く見受けられる様になって来た事はとてもよろこばしい事と思います。

近年、会議所が行った『ジャパンブランド育成事業』では三年続けてパリに出展する事が出来、昨年九月には、ロシアのウラジオストクでまた今年の六月には中国の広州で「こぎん刺し」を紹介する機会が与えられています。

この「こぎん刺し」を生業にしている私共「弘前こぎん研究所」は『青森県の津軽が生んだ「こぎん刺し」伝統の素材と技術を守り、全て手刺しによる製品作りをしております』地場産業の一部を担っている事を自負し、正しく伝える事を心掛けて行きたいと考えます。

そしてギャラリー愛海詩さんとは、愛海詩オープン当時からお付き合いを頂き毎回新しい出会いと皆様からの貴重なご意見を頂戴しております。今回は「アケビ蔓細工」とのコラボ作品、その他の素晴らしいこぎん刺しなどを展示致しますので是非ご高覧頂きますようお願い申し上げます。

そしてこれからも誠実、実直な物作りの姿勢、この「こぎん刺し」を多くの方々に知っていただき、使っていただきたいと願うものであります。

西こぎん
中津軽郡一帯で作られたこぎん刺しは、重い荷物を背負う仕事の人が多かったせいか、肩の部分に黒糸と白糸で交互に刺した縞があります。また、麻布が緻密なため、模様が細かく手間をかけている作品が多く見られます。

東こぎん
太めの麻糸で粗めに織られた布に刺されています。枠模様を数種組み合わせ、その中に単位模様を展開する繰り返しがあります。おおらかな作品が多く見られます。

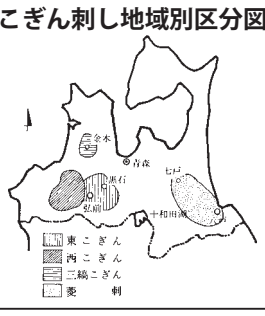
三縞こぎん
胸と背に太い三筋の縞模様が入っているのが特徴です。度重なる冷害や凶作のため、こぎん刺しをする生活上の余裕がなかったためか、現存するものは少ない。三本の縞は遠目にもくっきりして上と下の模様を引き立たせ、優れたデザイン性を感じる。

お知らせ
①6月5日（木）、午前11時から約1時間、弘前こぎん研究所の所長、成田貞治氏がFMラジオカロス札幌78.1Mhz、「木曜而今（にこん）」に出演されます。興味深いお話し、お聞き下さいませ。
⑪勝手を申しますが、6月7日（土）、研修のため、ギャラリー愛海詩、お休みさせていただきます。

愛海詩の会「写経・座禅」のご案内
写経と座禅の持つ魅力は宗教を問わず、心身共に素晴らしいものです。この有意義な時を静かに楽しみたいと思います。
未経験の方も安心していただける内容ですので、ご参加下さいませ。

日　　時　　平成二十六年七月六日　午後一時三十分から午後四時半頃迄
会　　費　　二千五百円（法話、お茶、お菓子付き　納経料二千円当日別途）
場　　所　　浄國寺（札幌市西区山の手一条十二丁目一の二）
　　先着二十名様
※ギャラリー愛海詩へお問い合わせ下さい。
TEL.〔011(613)1112〕

愛海詩の会
副会長　小竹　徹哉
監　事　葛西ひとみ

こぎん刺しの種類と特徴
古いこぎん刺しが発見された地域は青森県内でもごく一部に限られ、弘前市を中心とする津軽地方のみ。いっぽう、八戸を中心とする南部地方では、こぎん刺しとは特徴を異にする「菱刺し」が行われました。
こぎん刺しが盛んだった津軽地方の農村地帯は、岩木川を境に3つの地域に分けられ、「西こぎん」「東こぎん」「三縞こぎん」の3つに分類される。それぞれの地域の風土や生活様式によって、独特の模様のパターンが生み出されました。

こぎん刺し地域別区分図